



鳥取市新市域振興ビジョン

～全市一体となった夢のあるまちづくり～

鳥取市

平成26年8月

目 次

第1編 はじめに

1. 「鳥取市新市域振興ビジョン」策定の趣旨 1
2. ビジョンの位置づけ・目標期間・対象地域 4

第2編 現状認識

1. 合併後10年のまちづくり 5
2. まちづくりの成果 6 ~ 8
3. 10年先をめざしたまちづくり 9
4. 地域共通の現状と課題、これからのまちづくり 10 ~ 14
5. 地域別の現状と課題、めざす将来像 15 ~ 31
国府町、福部町、河原町、用瀬町、佐治町、気高町、鹿野町、青谷町
6. 新たな施策の展開 32 ~ 48

第3編 夢と希望が持てる鳥取市の発展をめざして

1. 新たな時代へのまちの姿 49 ~ 79
2. 「鳥取市新市域振興ビジョン」の実現にあたって 80

参考資料

1. 地域の歴史、特性、資源 81 ~ 88
国府町、福部町、河原町、用瀬町、佐治町、気高町、鹿野町、青谷町
2. 地域審議会のその他の意見・提案 89 ~ 91
3. 用語解説 92 ~ 95
(本文中※印の用語を解説)

1. 「鳥取市新市域振興ビジョン」策定の趣旨

鳥取市は、平成16年11月1日、周辺8町村の国府町、福部村、河原町、用瀬町、佐治村、気高町、鹿野町、青谷町と合併を行い、山陰初の20万都市・新鳥取市が誕生してから、満10年を迎えました。

合併してこれまで8町（新市域）は、新鳥取市としての一体性の速やかな確立及び住民の福祉の向上等を図るとともに、全市の均衡ある発展に資するよう、「新市まちづくり計画」、「第8次・第9次鳥取市総合計画」を基本に、8つの総合支所が地域振興などの役割を担い、住民とともに地域の「個性」や「魅力」を活かした特色あるまちづくりの実現に取り組むことにより、全市一体的に着実に発展してきました。

しかしながら合併して10年が経ち、時代の潮流は人口減少や少子高齢化の一層の進行による社会構造の変化、地域経済の低迷、環境・エネルギー革新、情報通信の高度化など、新市域を取り巻く社会情勢は大きく変化しています。

これからも全市一体的に、本市の将来像を見据えた着実な発展をめざすため、新市域の魅力と新たな課題を踏まえながらまちづくりの取組を推進していかなければなりません。

「鳥取市新市域振興ビジョン」は、合併10年を契機とし、新たな時代へのまちづくりを前進させ、次の世代へと地域が引き継がれ、大きく未来に「飛躍」していくため、新市域の10年先を見据えた夢のある将来像を描き、行財政基盤の確立や地域振興の継続・発展、協働によるまちづくりの推進など、地域それぞれ特有の「個性」を活かしたまちづくりの方向性を示すものです。

本ビジョンは、「新市まちづくり計画」、「第9次鳥取市総合計画」など、関連計画と整合させて諸事業を推進していきます。

また、総合支所を中心とした地域生活拠点を核とするまちづくりや本市がめざす多極型でコンパクトなまちづくりの実現に向けた取組と整合させたものです。

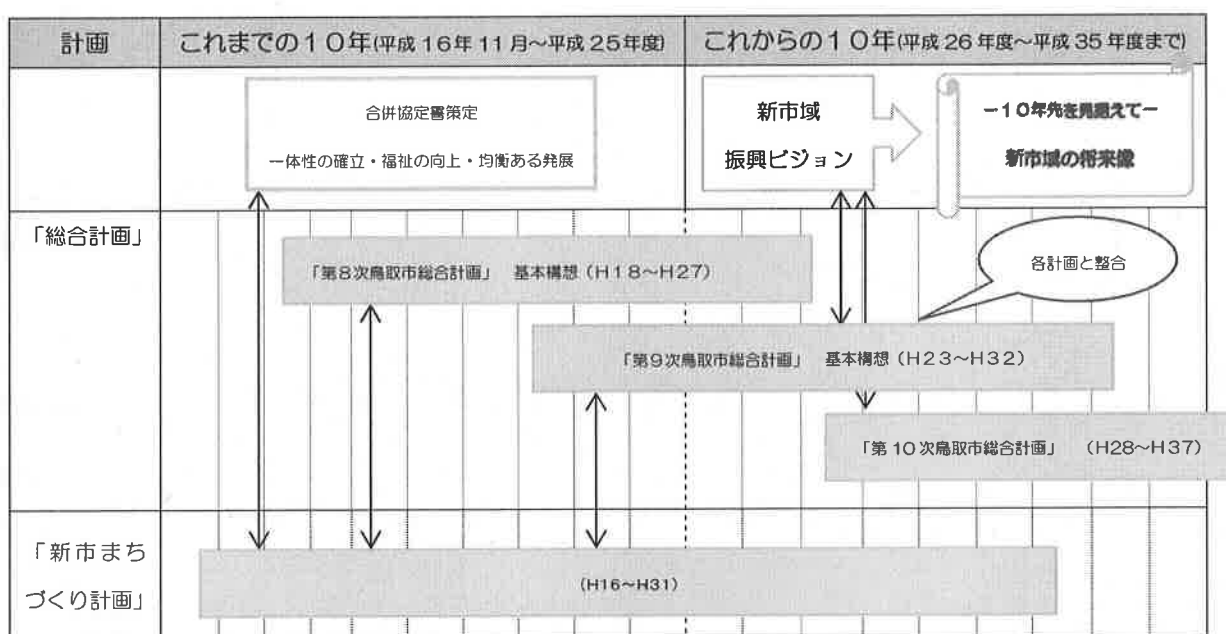
2. ビジョンの位置づけ・目標期間・対象地域

◆位置づけ

新市域の振興については、合併時に策定した「新市まちづくり計画」とその内容を継承した「第8次鳥取市総合計画」及び「第9次鳥取市総合計画」に基づいて、各種事業を実施してきました。

本ビジョンでは、合併後10年間の取組を踏まえ、新市域のこれからの10年先を見据えたまちづくりの方向性を示すために策定するもので、本市の各計画の基本的な内容と整合を図るとともに、国・県の制度・施策等との連携を取りながら、全市一体的な発展につなげていこう、新市域のまちづくりの前進に取り組めます。

なお、本ビジョンで示したまちづくりの具体的な取組については、「鳥取市総合計画」をはじめ各計画において盛り込み、実現に向けて検討します。



■「新市まちづくり計画」(平成16年～平成31年度)

「新市まちづくり計画」は、合併後の鳥取市の一体性の速やかな確立、住民の福祉の向上、均衡ある発展などをめざすとともに、合併特例法*に基づく各種の財政支援措置を導入するための前提となる計画として合併時に策定しました。

◆目標期間

本ビジョンの目標となる期間は、平成26年度(2014年度)から平成35年度(2023年度)までとします。

※ビジョンとは、将来のあるべき姿を描いたものです。

◆対象地域

国府町、福部町、河原町、用瀬町、佐治町、気高町、鹿野町、青谷町の8地域とします。

なお、この8地域を合せて新市域(旧町村エリア8町)と呼称します。

1. 合併後10年のまちづくり

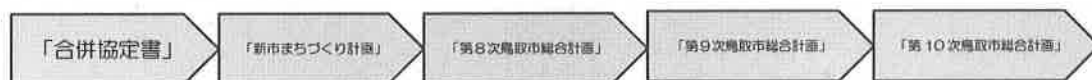
鳥取市は、平成16年11月1日の合併により、面積766km²、人口は20万人を超える都市となり、鳥取県東部生活圏に暮らす住民の8割を占める名実ともに山陰最大の特例市*（平成17年10月1日指定）、日本海地域有数の中核都市に生まれ変わりました。

◆これまでのまちづくり

合併により1つとなった鳥取市は、それぞれの地域が持つ「特性」や「資源」を活かして、将来像「人が輝き まちがきらめく 快適・環境都市 鳥取」にふさわしい魅力ある都市に生まれ変わるよう、9市町村による合併協議会で策定した「新市まちづくり計画」を「第8次・第9次鳥取市総合計画」に内容を継承し、めざすべき姿とその方策を明らかにして取り組みました。

これまで、新市の一体性の速やかな確立と住民の福祉向上等を図るとともに、新市の均衡ある発展をめざし、地域の課題解決等に積極的に取り組み、地域において合併の成果が着実に表れています。

新鳥取市として、計画に基づいた着実なまちづくりの取組



合併後10年、新市域の豊かな自然や歴史的な遺産、伝統工芸品など数多くの魅力ある地域資源を、関係団体などとともにまちづくりに最大限活用して地域の活性化を推進し、それにより本市の将来像に向かって前進してきました。

4. 地域共通の現状と課題、これからのまちづくり

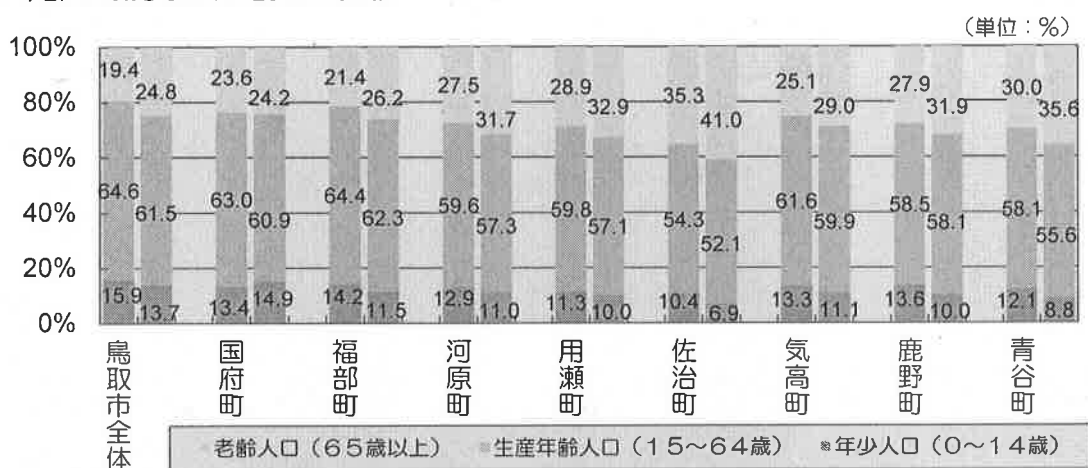
◆社会情勢の変化

本市の人口は、少子化や生産年齢人口の流出超過などから、平成17年をピークに減少傾向となっています。年齢階層別人口では、少子化・高齢化が一層進行しており、働く世代の人口構成に占める割合が減少してきています。

新市域においては、これらの推移が顕著に現れてきており地域そのものの活力が失われつつあることに、地域の方々は懸念を抱く状況となっています。

合併してから10年経過する中で、新市域を取り巻く社会情勢の変化は、これまでも増して厳しい現実があります。

■年齢3区分別人口割合の推移



(注) 年少人口割合、生産年齢人口割合、高齢人口割合とも総人口に対する割合として算出。

グラフ中の棒の左は平成16年12月、右は平成25年12月時点のもの。

平成16年12月における年齢3区分別の人口は、年少人口（0～14歳）は3万人、生産年齢別人口（15～64歳）は12万9千人、高齢人口（65歳以上）は4万2千人です。

(資料) 住民基本台帳による。

■鳥取市各町の人口推移

(単位：人)

	平成16年12月	平成26年6月	増減率
鳥取市全体	200,532	193,221	△3.6%
国府町	8,618	8,606	△0.1%
福部町	3,479	3,082	△11.4%
河原町	8,349	7,372	△11.7%
用瀬町	4,248	3,730	△12.2%
佐治町	2,821	2,209	△21.7%
気高町	9,930	9,045	△8.9%
鹿野町	4,385	3,993	△8.9%
青谷町	8,069	6,665	△17.4%

(資料) 住民基本台帳による。

本市の人口は、平成16年12月から比べ、平成26年6月には7,311人(3.6%)減少しました。

佐治町は612人(21.7%)、青谷町は1,404人(17.4%)減少、新市域におけるすべての地域で人口減少が進んでいます。

人口減少と少子高齢化は新市域において特に顕著であり、本市全体における大事な課題となっています。

◆河原町

① 協働による防犯対策の推進

子どもたちの安全な暮らしを脅かす事象の発生をきっかけに、平成 19 年度より、官民協働で「自分たちのまちは自分たちで守る」をスローガンに掲げ、「青色防犯パトロール」を開始した。町民の防犯意識の向上と犯罪・不審者の発生を抑止し、児童・生徒はもとより、地域住民が安心して暮らせるよう、これらの取組を継続することが必要です。

② 農業の振興と有害鳥獣対策の推進

農業の後継者不足に伴う耕作放棄地の増大などに対応するため、専業農家はもとより農産物加工グループ、兼業農家、高齢者農家などの支援を行い、農地の荒廃防止と年金＋αによる、生きがいづくり農業が必要です。

また、有害鳥獣による農林業被害が増え、従事者の農林業を継続する意欲が低下しています。そのため、狩猟者育成、鳥獣害防止柵・捕獲奨励金制度等を活用するとともに、獣肉を高級食材のジビエ*として有効活用を図る、「いなばのジビエ連絡協議会」と連携して、そのブランド化や販路開拓を進めることが重要です。

③ 企業誘致の推進と移住定住の促進（若者の流入・定住促進）

本市では、大規模事業所の事業再編等により、多くの離職者が発生しています。民間・公共の遊休施設を活用した企業誘致と河原インター山手工業団地の着実な事業推進を図り、若者の就業機会の増加など、地域内雇用の創出を図ります。

また、民間による住宅団地・分譲地の整備を促し、居住環境を充実するとともに、グリーンツーリズム*などの体験交流の拡充を図り、移住定住を推進することが必要です。

④ 子育て・教育環境の充実

子育て環境づくりとして、地域の中で支え見守っていける環境づくりと支援体制の充実を図るため、河原町中央公民館、河原第一小学校、西郷小学校の耐震改修などの整備を計画的に行い、施設を長期に安心して利用できるようにすることが必要です。

また、地域住民と小・中学校 PTA 及び本町の児童・生徒が共同して開催する「河原町未来を語る会」の継続実施を支援し、本町の未来についてそれぞれの立場で意見を出し合い、児童・生徒の健全育成を図ることが必要です。

⑤ 観光振興に伴う交流人口の増

本町の街並みを展望できるお城山展望台「河原城」、古くは、湯治場として有名な「湯谷温泉」、自然豊かで四季を通じて彩どりが楽しめる「三滝溪」、ジオパーク*エリアで、パラグライダー等の名所「霊石山」、大国主命が会いに来た八上姫を祀る「売沼(めぬま)神社」など、本町の豊かな観光資源を生かし、観光産業の活性化につなげることが求められています。このため、年間約 150 万人が利用する「道の駅清流茶屋かわはら」を情報発信の拠点として、観光振興と交流人口の増加に向けて戦略的に取り組むことが必要です。

●めざす将来像

誇りと夢・ぬくもりのある町をめざして 【河原町】

本町は、古代因幡における国づくり発祥の地ともいわれる「八上郡」の中心地であり、このような歴史を背景に本市南部の中にあっても、気象、地形等の恵まれた自然条件と河川・道路の主要な結接点をなす立地条件を基に、地域産業や農業で主要な役割を果たしてきました。

鳥取自動車道全線開通、また、河原インター山手工業団地の整備着手など「本市南部の表玄関」としての新たな役割が求められています。

そこで、今後10年間（平成26年度～平成35年度）の本町の新たな発展について、3つの理念を掲げ推進します。

一、人や地域に「誇り」のもてるまちづくり

豊かな自然と歴史、文化を大切にするとともに継承・活用し、郷土を誇れるまちづくりを進めます。

一、未来に広がる「夢」のあるまちづくり

子どもたちが学校、家庭、地域の中でのびのび育ち、老若男女が元気に過ごせ、夢の実現や可能性に挑戦できる環境整備をし、「住んでよかった」、「生きがいがある」夢のあるまちづくりを推進します。

一、みんなが支え合う「ぬくもり」のあるまちづくり

誰もが生涯健康に過ごせるよう、病気予防指導や、医療、福祉の充実を図ります。また、安全で安心な暮らしができるよう、住民、関係団体、行政が連携を図ることにより、みんなが支え合い、一人ひとりが大切にされるぬくもりのあるまちづくりを進めます。

◆ 河原町

●歴史

本町は、古事記に日本最古の恋物語「八上姫神話」が記されていることから分かります。古代より因幡国八上郡の中心として栄えた地域で、美しい山野に囲まれた、豊かな緑と清らかな千代川の流れて平野が広がり、産業・経済・文化等幅広く発展してきました。

昭和30年3月、河原町・国英村・八上村・散岐村・西郷村の5つの町村が合併し新たな「河原町」が誕生し、その49年後の平成16年11月に1市8町村の広域合併で鳥取市河原町となりました。

町名は、千代川と八東川の合流点の広い河原の上にてきた町であり、中洲であり、磧（かわら）であったことからつけられたと記されています。

●特性

①鳥取県東部圏域の中央に位置し、河川・道路の主要な結束点でもあり、特に河原インター付近「道の駅清流茶屋かわはら」は「本市南部の表玄関」として、今後、河原インター山手工業団地、新可燃物処理場などの整備により、本市が発展する上での要所となっています。

②農林水産業は、稲作、果樹栽培が中心ですが、その他に畜産・原木椎茸栽培（乾燥椎茸含む）も盛んです。千代川では、鮎の稚魚の放流を行い、釣り人などの誘客につながっています。

③文化の町「かわはら」は、文化人として、物理学者・教育者「村岡範為馳」、医師で漂泊の詩人「伊良子清白」、郷土の歌人「田中寒樓」など多くを輩出している他、焼き物の里として「牛ノ戸焼」、「因州・中井窯」、「やなせ窯」の窯元があります。

本町の風土に刻まれた歴史の刻印も多くあり、弓河内と長瀬の大シダレザクラ、落河内の大キリシマ・カツラの木などの銘木も県指定文化財となっています。前田・郷原遺跡、稲常古墳群等、また木下家住宅、売沼神社、観音寺、大義寺等と戦国時代の雄将の「源範頼」、「武田高信」の墓等もあります。

④河原の旧道は、上方往来として鳥取から河原・智頭を通り、志戸坂峠を越えて山陽道・大阪・京都へ至る鳥取藩の参勤交代にも利用された重要な街道で、当時の河原村は旅人の休憩所である茶屋があったことから「上の茶屋」と呼ばれてにぎわいました。

●資源

区分	主なもの
特産品	梨、柿、しいたけ、鮎料理、焼き物（牛ノ戸焼、因州・中井窯、やなせ窯）いなば和牛
観光	道の駅清流茶屋かわはら、鮎釣り大会、お城山展望台「河原城」、三滝溪、湯谷温泉、霊石山
イベント	あゆ祭、河原城イベント（春の大茶会・中秋の月見会・元旦初日の出）、霊石山フライトフェスティバル、河原歴史民俗資料館文化伝承行事（七草がゆと鳥追い、釜やきほか）、西郷まるごと博物館～ぎゃらりーあっちこっち

2. 地域審議会のその他の意見・提案

本ビジョンの策定にあたり、「鳥取市新市域振興推進本部」を設置し、本部会及び各総合支所エリアの地域審議会において、合併以降の「新市まちづくり計画」や「第8次・第9次鳥取市総合計画」に基づいた事業の進行状況を確認し、現在の地域における課題や問題点、また今後の10年先を見据えた地域のまちづくりの方向性について内容を検討しました。

なお、各地域審議会では、次のような意見・提案がありました。

◆国府町

- 高齢者世帯にテレビ電話を設置するなど、安否確認が確実にできるシステムづくりや生活をサポートするボランティア組織の育成が必要である。
- NPO法人による小型バスの運行による交通弱者への対応や日常生活用品購入の便宜を図るための移動販売車の運行を考えてはどうか。
- 農地の保全について、中山間地域は人口減少と高齢化で後継者・担い手の育成確保がままならず、地域の農地をどう守るかが喫緊の課題である。今取り組んでいる「人・農地プラン」の作成について集落ごとに話し合い、経営体の育成を行うべき。
- デイサービスだけでなく、多目的な機能を備えた介護施設の整備が必要である。

◆福部町

- 防災行政無線のデジタル化に伴い、行政情報、集落情報など現在行っている地域のきめ細やかな情報の伝達が出来なくなり、住民サービスの低下が懸念される。今後の対応として有線放送設備の補助制度など地域情報の伝達対策を検討する必要がある。
- 山陰海岸ジオパークエリアが青谷町まで拡大し、本市の魅力としてこの自然遺産を積極的に活用し保全する必要がある。福部町から青谷町までの海岸には漂流物が多く流れ着き景観を損ねている状況であり、今後は定期的な清掃活動など抜本的な対策を考える必要がある。
- 観光資源のうち遊歩道、散策道などの観光施設は、施設の老朽化と不十分な管理などで効果が十分に発揮されていないものが多く、これらを有効に利活用するための対策が必要。また、風光明媚な景観を成し、観光資源として重要な樹木の保全対策を実施し、景観形成の維持に努めることが重要と思われる。

◆河原町

- 新可燃物処理場整備事業の推進と併せ、当地域の福祉・保健・医療の充実及び教育・文化振興を図る施設整備を検討する必要がある。
- 河原インター山手工業団地の整備促進と併せ、当地域の優良な土地を活用し、さらなる工業団地の拡充、商業施設の集積、文化施設等の誘致及び整備を図るとともに宅地造成・分譲等行い、職及び衣食住一体のまちづくりの構築を進め、都市近郊型農業とのバランスを図りながら、本市南部地域の拠点（コンパクトシティの中核）として、本町の発展をめざす。
- 本町の特性「文化人、文化財、農業、自然」等と宝「河原城・売沼神社・焼き物（陶器）」等を活用した観光振興を具体的に進める。
- 鳥取自動車道全線開通による経済効果をさらに高めるため、「道の駅清流茶屋かわはら」附近ヘトラックターミナルなど輸送基地を誘致し、物流拠点としての活用を推進するとともに「道の駅」を活用した多様な情報発信を強める。

◆用瀬町

- 本町最大のイベントである「流しびな行事」の期間延長や流しびなに関連づけたイベントの開催を検討するとともに、民泊施設の取組が必要ではないか。
- 地域の核として育てる施設を「指定管理者制度」で委託することがいいのか、今一度見直してみる必要がある。
- 地域のボランティアが活動しやすい仕掛けづくりが必要と考える。
- 地域内の女性団体や加工グループのネットワークを作り、盛り上げることが必要。
- まちづくりには「テーマ」を決め、アピールすることが大切である。また、町全体として進めるためには、組織づくりとリーダーが必要となる。

◆佐治町

- 移住・定住について
 - ・積極的に地域の魅力をPRし、家＋農地等をセットにした居住条件の設定など魅力的な施策が必要。
 - ・空き家の利活用を促進して集落の維持存続や地域活性化に取り組む施策が必要。
 - ・少子高齢化、後継者不足対策として婚活の定期的な実施などの施策が必要。
- 産業振興について
 - ・農地の集約より共同経営等のビジョンを明確にする取組が必要。
 - ・和紙産業の振興については従来とは異なった斬新な取組が必要。
 - ・有害鳥獣の解体処理施設の早期建設が必要。
- 防犯、防災対策について
 - ・消防団の再編や地域の地形や現状にあった施策とする配慮が必要。

◆気高町

- 本市西部地域のグランドデザインについて、「道の駅」を造る構想があるが、3町それぞれ特徴のある売り物を作り出す必要がある。
- 気高のときめき祭、鹿野のわったいな祭、青谷のようこそ祭を一つにして回り持ち制にして大々的にできないだろうか。
- 津ノ井や河原町だけでなく、本町の方へも企業誘致をして少子高齢化を止めてほしい。

◆鹿野町

- 安心して子育てができる教育や環境を PR して、中心市街地のベッドタウンとして売り出す。
- 一人ひとりが健康を意識したまちづくりを進めるため、核となる健康づくりプロジェクトチームを結成し、各集落へ出かけて行く仕組みをつくる。

◆青谷町

- 青谷地域の現状は、他地域に比べ元気がない。めざす将来像実現のためには、もっと地域、民間が頑張る必要がある。特に、リーダーとなる人材の発掘、育成が急務である。
- 青谷高校の存続は、「青谷高校が何故青谷地域に必要か。」という原点に立ち返る必要がある。「卓球」を地域の資源、宝として再認識し、地域を挙げて「卓球の青谷高校」を復活させる取組を進めよう。